泣き虫悪魔の物語

mia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
泣き虫悪魔の物語

【Ｎコード】
Ｎ９２０６Ｔ

【作者名】
ｍｉａ

【あらすじ】
８歳までの記憶を失ったアスラ。自分が誰なのかも知らない。そんなアスラが、１０年間、牢獄の中でずっと変な夢をみていた。それが、人生で一番、楽しいことだと思ってた。別に脱獄しようなんて気は起きない。そんな、意味のない日々をテキトーに過ごしていく。そんなある日のこと、外に出れるチャンスが。少し笑えたり笑えなかったりな話。※もしお時間があれば、感想、意見をもらえると助かります。

真っ黒

「黒い瞳・・・・。黒い髪。噂の彼(アイツ)か・・・・・。でも、まだ子供じゃないか・・・・・・」

「ああ・・・・。そうだ。でも、こいつ・・・・半端なく強い。本気で襲いかかられたら、オレはあの場で死んでいた」

今現在、勇者と呼ばれている男。
側近のラーク・ホルンは恐怖で震えた声で、若き王、エルン・ロイヤーに言った。

ラークのとなりには、気絶したままの、ボロボロな黒髪の子供がいた。

ラークはその子供を戦場から連れて、帰って来たのだ。

「んで、あの村は降伏したのか？」

「ああ、すぐに降伏した」

ラークは残念そうに言った。
まるで、望んでいないかのように。

「オレに・・・・変えることができるだろうか・・・・・」

「あのときの二の舞にならないためにも・・・・オレはこうしてお

前に従っている」

「・・・・そうだったな・・・・」

そして、ぼろぼろの子供を見て、わざと困った素振りをラークに見せつけ、

「ところでさ・・・ラークが拾ってきた、この子は、村の登録番号に載ってない・・・ってことは、あの村の者じゃないみたいだね」

「陛下は、どうしたいんですか？」

「・・・・んーと・・・じゃあ、ラークが面倒みればいいと思う」

「ご冗談を」

本当に嫌そうに苦笑いした。

「・・・・気持ち悪いな・・・・オレに敬語を急に使うな・・・・『陛下』もダメだ・・・・からかっているのか？」

「はいはい・・・」

「じゃあ聞くけど、ラークは、この子供をどうしたい？」

「この子供は、生かしておくと必ず、国の脅威になる。今すぐ処刑・・・あるいは、この城の地下にある、光も決して、入らないあの牢獄の中に・・・・」

「厳しいな・・・・子供にも容赦ないんだな・・・・」

少し考えるようにして、罪悪感の残るような顔で、

「そこの子供を地下牢にいれろ・・・・」

「はっ」

兵士は、その子供を地下牢へ連れていった。

――

東大陸最大の国、アルタ帝国と南にある小さな村、ベオル村との戦争。

この戦争のときは、まだ、エルンが王ではなかった。エルンの父にあたる人物、カイン・ロイヤーがアルタ帝国の王だった。

アルタ帝国の兵力は五万。それに比べ、ベオル村は五百だった。

あの南大陸最強と言われる村でもさすがにこの兵力差では勝てないだろうとアルタ帝国の誰もがそう思っていただろう。

そして、ベオル村はあっけなく、降伏した。

だが、アルタ帝国の兵力は半分に減ってしまった。

たった五百の兵力で。あり得ない話だった。

アルタ帝国の生き残りの兵士の誰に聞いても、みんな同じことを言った。

「悪魔がたくさんいた――――――」と。

この戦争はあまりにひどいものだった。

子のエルンから見ても、やはり醜いものだった。

村の住人、女、子供も容赦なく殺されていた。

もはや、ただの殺戮だった。

本当にこの戦争は必要なことだったのだろうか。

エルンは父を止めに戦場へ出たが、そこは、赤い血とその匂いで広がっていた。

匂いを嗅ぐだけで、嘔吐してしまうようなところだった。

そのときの父は言った。

「殺(ヤ)らなければ、殺(ヤ)られる。」

虫一匹殺せないようなお人よしであった、父親がそう言った。

エルンは、父を止めようとはしたものの、恐怖と絶望で足が、動かなかった。

そして、

この戦争の途中で、エルンの父、カインは暗殺され、母は逃亡した。

母はまだ行方が分からず。

でも、自分の心は自分が思っている以上に、冷たかった。

なぜか、母を探そうとは、思わなかった。

――――――戦場の父はいつもの父ではない。

きっと狂っている。狂わされている。

止めることができなかったのは、父がどんな誰よりも・・・・・・・。

化け物に見えたから。

真っ黒（後書き）

初投稿です。
この小説は週1のペースで頑張って書いていきたいと思います。
小説でアドバイスなどしてくれると嬉しいです。
1つ1つが短いと思いますが
そこはご了承ください。

謝罪

「ステラ！！　ステラ！！・・・　死んじゃだめだ。生き残って、また会おうって言ってたじゃないか！！」

村が燃えていて、人々が逃げ惑う中、
黒い瞳と黒髪の少年は、短剣が腹部に刺さっている意識のない彼女を抱え、泣きそうな顔で、
彼女の目を覚まさせるため、必死に彼女の名前を呼んだ。

「・・・・・・・」

応えは返ってこない。

彼女が死ぬ。

そう思うのを、自ら打ち消すように、ひたすら彼女の名前を叫ぶ。

「・・・・・・・」

何度やっても同じ。

返事はない。

一番最悪なことが起こるのではないかと、彼女の危機を感じている。
彼女の名前を呼ぶたびに、負の感情が徐々に大きくなっていく。

もしかして・・・・彼女はもう・・・・・目を覚まさないのかもしれない・・・・・。

あきらめを考えたその時、

「・・・・・ら・・・あ・・・・・・・アスラ・・・・・・・」

今にも消えそうな力のない虚ろな声が聞こえた。

「ステラ!!!!!」

アスラはその声に瞳を輝かせた。

「やっと、会えたね」

腹部の痛みに顔を歪ませるが、なんとかアスラに笑顔を向けようとする。

「・・・そうだね。・・・・よかった・・・。なあ、この村を出たら、オレと旅をしようよ・・・・・世界を歩きまわるんだ」

「いいわね・・・・・旅か・・・・・」

「じゃあ、その前に、この傷を治さないと・・・・・今、応急処置

を．．．」

「アスラ．．．．聞いて」

アスラの言葉を遮って、彼女は真剣な顔で、

「私、あなたにしてもらいたいことがあるの」

「なに？」

「ここから、今すぐ逃げて」

彼女はアスラよりも泣きだしそうな表情（かお）になって、アスラの手を強く握った。

「そんなの、だめだよ。ステラの手当をしないと．．．．」

しかし、彼女は続ける。

「もうじき、身体（わたし）が『餌（えさ）』を求め始める．．．だから．．．早く！」

「喋んないで。傷が悪化するから．．．．．今、手当を．．．．．」

「お願い．．．．．。早く、そうしないと身体（わたし）はあなたを殺してしまう．．．．」

「．．．はぁ！？．．．何を言って．．．そんなわけないだろ。変な夢でも見てたのか．．．？」

アスラの手を握っていた力は弱くなっていく。

そして、ステラは動かなくなってしまっていた。

それと同時に、何かを貫くような雑音(おと)。

それに気づいたときには遅かった。

「え・・・・!?!?」

激痛が走ったのは胸のあたり。

胸のあたりを見てみた。

あぁ・・・。ようやく理解(わかった)した。

その光景は、あまりにひどくて。

友人である、ステラの手が、赤く紅く染まっていた。

友人である、ステラの手が、僕の胸を貫通していた。

「!!!!!!!!!」

悲鳴(こえ)にならない悲鳴をあげたが、誰も助けになんか来てくれない。

どういう状況か分からない。

どうしてステラが？

胸から血が・・・・・さっきのステラより、ひどいんじゃ・・・・。

これ・・・いわゆる・・・・・致命傷。

血がどんどん流れて・・・・・。頭がクラクラする。

頭上から、声が聞こえた。

見上げてみると、ステラはすでに立っていて、
アスラを見下ろしていた。

「ごめんなさ・・・ぃ・・・ごめんなさい・・・」

ステラはひたすら、そんなことを言って泣いていた。

誰に謝っているのか、よくわからなかった。

「そんな泣くなって・・・・せっかく目覚めたのに・・・・泣かなくても・・・」

だが、彼女は泣き止まなかった。

「・・・泣きたいのはこっちだよ・・・・」

雲一つない、きれいな青空に言った。

これがオレの運命だというなら、それでもいいと思った。

「許して・・・・・ごめんなさい・・・・・」

そう言って、ステラは何かを食べ始めた。

赤い何か・・・・・。

ステラが心臓を食べていて・・・・・。

あぁ・・・・あれは心臓(オレの)だ。

そこで、オレは死んだ。

不気味な住まい

外の光など決して入らない闇、

アルタ城の地下牢。

入れば3日経たずで、人の精神は狂い、

そして、6ヵ月で、公開処刑。

その牢から、脱出するのは、まず、不可能だと言われている。

つまり、入れられたら最後だと。

まあ・・・そんな牢に入る人もある意味すごい。

こうした容赦ない厳しさが、アルタ帝国を支えているのだろう。

アルタ帝国の城下町には、アルタの地下牢の恐ろしさを描いた、絵本などが売っている。

子供に、罪を犯したら、怖い思いをするという印象を与え、犯罪防止をしている。

「・・・・・でも、違うんだよなぁ・・・」

黒髪、黒い瞳に痩せ形の青年、アスラは、めんどうくさそうに言う。

アスラは、現在、アルタ帝国の地下牢に閉じ込められ、

今年で、１０年目になる。

「あ、そっか。そういや、ここに入って今年で１０年目。ってことは、今年で１８になるのか・・・。」

なんて、呑気なことを考える。

まるで、どうでもいいことかのように。

普通なら、６ヵ月で死刑。

なのに、オレは１０年も生かされている・・・・・。

本に書かれていた内容によると、

ここは、光が届かない闇の牢らしい。

でも、闇って言うほど暗くないし・・・・

暗闇に目が馴れたとか？

うーん

それに、オレ、ここで過ごして１０年目だし。

不可解なことと言えば、隣人たちぐらいかなぁ・・・。

右隣の牢からは、壁に突進しているような音と、

鼻息の荒い音がする。

それに加え、左隣の牢からは、

ぶつぶつ、泣きながら、独り言を言っている声が聞こえる。

ここって、いろんな意味で危ないんじゃ・・・・

それに、こっちのほうが、

本の内容よりも、はるかに不気味で怖い・・・・。

ベッドの上で、そんなことをまじまじと考えていたら、

５人の城の兵士がオレの牢の方に歩いてきた。

「えっと・・・・ なにかご用ですか？」

馴れなれしい口できいてみる。

1人の兵士は服の中から、命令書を出して、オレに手渡し、

「アスラ・リーア、お前は今日、旧アルタ孤児院に移ってもらう。」

「・・・・・・・。」

実際どうでもよかった。

どうせ、孤児院という名目の場所で、

また、監禁させられるのだろう。

ただ、場所が変わるだけ・・・・・。

そして、アスラは気だるそうにあくびをして、地下牢を後にした。

不気味な住まい（後書き）

おまたせしました。

これが、この小説の本文です。

2話までは、過去の話が多かったので、

分かりづらかったと思います。

これからも、読んでくださると嬉しいです。

記憶と案内人

「ここが、お前の監禁(ウチ)場所だ。」

馬車に乗せられ、旧アルタ孤児院に到着した。

馬車を降りて、辺りを見渡す。

山奥の森の中、近くには川が流れている。

小鳥がさえずっていて、とても美しい自然のなかに

その孤児院が建っていた。

そこでは、楽しそうに遊んでいる子供たちの姿があった。

「あれ・・・・なんかイメージと違う・・・」

そして、孤児院の中を案内される。

孤児院の中は、外と違って、うす暗く、

孤児院というより、むしろ研究所だった。

「ここって・・・本当に孤児院なんですか?」

案内人は答える。

「ここは、研究所を改装した建物だから、まだ、中にあった機械とかはもったいないから、残してあるんだ。」

「あぁ・・・そうですか。」

「君の牢屋(へや)は、一番奥の棟にあるから。」

案内人は、少し嫌そうな顔で、その棟を差した。

その棟の中は、なんかいろんな意味ですごかった。

ひどかった。

「・・・・・・んな・・・・」

その棟の扉を開けた瞬間だった。

元孤児院だけあって、子供がたくさんいた。

そりゃあもうたくさん。

本当にたくさんの子供が。

たくさんの。たくさんの。

子供が。

死んでいた。

その棟から聞こえたのは、

苦痛で悲鳴をあげる子供の声。

友達が死んだのをみて、嘆く声。

恐怖で震える声。

その、生々しい光景は、何度も目にしたことがあって・・・・・・・。

しかし、それとは違って、初めて見たような光景で。

孤児院の外では、ここで何が起こっているのか、まだ知らない子供たちは、

きっと、今も楽しく遊んでいるだろう。

ひどすぎる。

「・・・・・ なんで、お前らこんなことを・・・・・！！！」

案内人の胸倉をつかもうとしたその時、

アスラの膝が床に落ちた。

激しい頭痛とめまい。

「ぅ・・・・・・・・・」

アスラの頭の中で、誰かが言った。

「ねー、アスラ。・・・・・・ ステラは生きてるよね？？？・・・・・・・・生きて帰ってくるよね？」

「そんなこと・・・・ オレにだって分からないよ・・・・・。」

記憶が流れ込む。

そして、アスラは頭を抱えたまま、床に倒れ、

気を失った。

「思い出したかなぁ・・・・・・・アスラ・・・・」

案内人は、なつかしそうに、優しく、呟く。

それに、虚無から生まれた彼女(やつ)は、嬉しそうに、

「きっと、彼はあなたを思い出すわ。」

あの夢

「ねー、アスラ。・・・・・・ステラは生きてるよね??・・・・・・生きて帰ってくるよね」

泣きながら、フィルはすがるように言った。

「そんなこと・・・・オレにだって分からない・・・・・」

弱い奴から死んで行くのは言うまでもなかった。

ここはそういうところだ。

「それに」

声を震わせて、

「次は、オレたちかもしれない・・・・・・もう・・・・・いやだ・・・・こんなこと・・・」

自分の無力さを感じる。助けてとしか言えない世界。

あの扉の向こう。

一言で言うなら『赤』。

ただ、ひたすら苦痛を生み出す場所。

ただ、ひたすら悲鳴が響く。
そこの住人がオレたち。

「ねえ、もし生き残れたら・・・・・」

そこで、言葉をとめ、

「なに？」

アスラが聞くと、決心するように、

「アイツらに復讐しよう」

フィルは瞳を潤ませながら言った。

「僕らの身体（からだ）をもてあそんだ、アイツらに・・・・」

アスラは頷（うなず）きはしなかった。

そのとき、研究員があの扉から出てきて、
ここの小さな牢のカギを開けて、

「・・・・・出ろ。フィル・フィアネ・・・・・」

研究員がフィルに声をかけた。

それを聞いたアスラは、顔を蒼白にさせて、

「フィ、フィル・・・・・、待っ・・・・・」

アスラが言うのを遮って、悲しい顔で、

「・・・・じゃあね。アスラ・・・・。さっきのは約束だよ・・・・・」

だが、アスラは何も言わなかった。

それが別れ(さよなら)だった。

そして、研究員はステラが連れて行かれたところへ、

フィルを連れて行った。

すぐに、扉(そこ)から悲鳴(こえ)が聞こえた。

「やめ・・・・っ・・・・・・きゃあぁあああああああああ」

フィルの前に連れて行かれたステラの悲鳴(こえ)。

それに驚いて、アスラは、牢をなんとかこじ開け、その扉を開けた。

それは、あまりに酷い光景だった。

「え・・・・なに・・・・これ」

思わず声を漏らす。

そこはイメージなんかとは違う。

本当の赤(ち)。

さっき入った、フィルが血まみれで、

フィルの瞳は輝(いろ)きを失っていく。

アスラは悲鳴をあげようとした、

そのとき、

《呼ンダノハ、オ前カ?・・・・人間》

どこからか声が聞こえた。

《早ク、契約ヲ・・・・》

ステラはその声に恐怖した形相で、

「だ、だれ・・・・!??」

《我ハ、共喰イ。魔ノ一族ダ。》

もう、ほぼ輝(いろ)きを失っている瞳のフィルを抱えて、

「フィル！！私のせいで・・・・フィルが・・・・・。・・・・・・フィルはこのまま死んじゃうの？」

《ソノ人間ヲ助ケタイノカ？》

「助かるの！！？」

わらにもすがる思いだった。

《ダガ、大キナ代償が必要ダ》

「何をすればいいの！！？」

《オ前ガ人間ヲ助ケルコトハ、不可能ダ。・・・・ダガ、我ガオ前ヲ半分喰ラッテ、魔人二ナレバ、簡単二助ケラレル》

迷いはない。

ステラは涙をぬぐい、

力強く言った。

「・・・・共喰い。・・・・私を喰らって・・・・フィルを助けて」

アスラにはステラを止める術（すべ）がなかった。

そして、彼女は魔人になった。

来客

「・・・・・うぅう・・・・・・・・・ステラ！！！！！」

薄暗いふかふかの上で、大きな声を叫んで、目を覚ます。

辺りを見回したが、夢(そこ)は、現実(ここ)にはなかった。

「・・・・・なんだ。」

ため息をつきながら、ベッドから起き上がって、

「・・・・・・ああ・・・そっか、ぶっ倒れたのか」

すると、後方からまだ幼さの残る声。

「・・・はい・・・・けっこう、うなされていましたよ・・・・変な夢でも見たんですか？」

「ん？」

後ろを振り向くと、そこには、

小柄でサイズの合っていない装備をしている、兵士らしくない兵士？みたいな人が突っ立っていた。

「お前・・・・いつから・・・・・」

アスラはふるふる震え、顔が赤くなっていく。

「・・・いつからでしょうかねぇ？　・・・・・えへへ・・・・・・もちろん最初から最後まで？」

その兵士は、気持ち悪い満面の笑みを見せる。

「て、てめぇ・・・・・」

「んーと、確か・・・・『ステラ！！ステラ！！！』って叫んでましたね」

含み笑いをし、おもしろそうにこちらを見て、

「なーに、赤くなってるんですかー。・・・・・ステラって昔の彼女の名前ですか？」

「知らねーよ」

「紹介してくださいよ。僕、けっこう女性の扱いうまいんですよ・・・・僕はやっぱり金髪の女性が・・・・」

「知るか！！！」

「・・・・・という、冗談は置いといて・・・・・」

「お前が勝手に、女性について語りだしたんだろうが！！！」

だが、さっきまでのへらへらした表情は、すでにその兵士から、消えていた。

「あなたが、アスラ・リーアですか？」
「あぁ。たぶん、そうだけど．．．．。」
眉をひそめて、もう一度、
「本当に、アスラさん？」
「だから、そうだって」
「さっきの、たぶんってのは？」
「それは．．．その．．．．。オレには記憶がなくて、牢に入れられている間、そう呼ばれていたから．．．」
「最初に誰から、アスラって呼ばれたんですか？」
「この国の王、エルン・ロイヤーの側近のラーク・ホルンってヤツ」
「じゃあ、あなたはアスラさんで間違いないですね」
そして、嬉しそうに、瞬きをして、
「ってことは、僕のこと覚えていませんか？」
「んー」
目を細め、腕を組みながら、まじまじとその兵士を見る。

だが、思い当たるような記憶がなくて、
困った表情で、ひたすら思い出そうとする。
それを見た兵士は、
「・・・・・・思い出せないんだね」
悲しみが混じった、消えそうな声で呟いた。
そして、その表情はすぐに消え、さっきのように無邪気に笑ってみせて、
それはもう、気持ち悪いくらい。
そして、何もなかったかのように、懐から鍵を出して、にんまり笑い、
「これ、なーんだ？」
「・・・・牢の鍵。・・・・・・どうやって、とってきたんだ？・・・・・釈放の命令がでたのか？」
「いや、実力行使で？」
その笑みはほんとに薄気味悪くて。
「・・・・・・・・・。・・・・・・・追手が来るんじゃないのか？」
すると、その兵士は、今、気がついたのか顔を青くし、
「あ」

コイツは忘れていたらしい。アホだ。

「早くしないと、お前、捕まって死刑になるぞ」

「そ、そうだね・・・。僕は、フィル・フィアネ。・・・・行こう、アスラ。」

「え、オレも!?」

「もちろん。・・・・あなたを脱獄させるために来たんだから」

そして、フィルは、牢の扉を開け、
アスラの否応なしに、アスラの手を掴み、逃げるようにして、牢をあとにした。

逃亡

「いたぞ、ヤツを捕えろ！！！」

脱獄して5分後、すぐに追手が来た。

うまい具合に物陰に隠れているのだが、ここもすぐに見つかるだろう。

「・・・・・お前がもう少し、頭が良ければなぁ・・・・・・」

ふと、口から文句とため息が出る。

「しょ、しょうがないじゃないですか！」

「・・・・はぁ・・・・・」

そして再度、漏れるため息。

「その・・・・・もしかして、僕、足手まといですか？」

瞳を潤ませて、こちらを見てくる。

だから、気持ち悪いって。お前、男だろ。

「うん・・・・・。今さら気がついたか・・・・・ お前、やっぱアホだな」

「少しは、お世辞でもいいから褒めてくださいよ！！！！」

「だって、褒められるようなことしてないだろ」

何も言い返すことができなくなって、フィルは、

「・・・・・ じゃあ、いい案がアスラさんには、あるんですか？」

「だいたい、お前は兵士の格好してるんだし、別にオレと一緒になって隠れなくたっていいんじゃないのか？」

「・・・・・ 確かに・・・・・ そうですね」

反論ナシ。フィルは納得してしまった。

そして、なにかを考えるような素振りをして、物陰から出た。

「待っ・・・・・」

それを言うのはもう遅かった。

廊下に突っ立っている兵士が、

兵士の装備をしたフィルを見つけ、

「そっちにアスラ・リーアはいたか？」

フィルはなんの戸惑いもなく、

「いえ、いませんでした」

よほど、自分の演技に自信があるのだろう。

しかし、そう上手くいくはずもなく、

「そういえば、見知らぬ顔だな・・・・新入りか？」

「は、はい・・・・」

「配属名と、担当地域は？」

「・・・・・・・」

なにも答えず、うつむいた。

そんな、状況を口をあけてアスラは茫然と見ていた。

ダメだ・・・・ありゃ・・・・・。

そして、当然のようにバレる。

ところが、フィルよりも、声をかけた兵士の方が顔が青くなっていた。

「貴様、まさか『命灯(めいとう)揺らぎ』か？」

ん？誰のことを言っているんだ？

「ご名答です」

そして、立場上まずいことになっているにも関わらず、

「アスラーアスラー、バレちゃった」

後ろに振り向いて、こちらに手を振ってくる。

「うわぁ！アホ！！手を振るな！！！！！・・・・・・逃げるぞ！！！」

そうして、やっぱりフィルはバカだということを再確認したアスラと上手くいかなかったフィルは、

ひたすら、孤児院内を走り回って逃げた。

そして、２０分が経過――――――――――――――――――――

「お前、オレを脱獄させるために、来たんだよなぁ？」

うつむき、小さな声で、

「はい・・・・・・」

「それで、迷子って・・・・・・その・・・・・オレに恨みでもあるわけ？」

「本当に、申し訳ないです・・・」

「これって、地味な嫌がらせかな？・・・・・・なんて・・・えへへへ・・・・」

これは、もうどうしようもない。

迷子で、行き止まりで、スタミナ切れで、兵士に囲まれて。

「うぅう・・・・・脱獄なんかしなければ・・・・・えっと・・・・どうしようか・・・・」

「じゃあ、一番したくなかった手を使おうと思います・・・・」

「え・・・・・なにすんの？・・・・・・命乞いなら一人でやってくれよ！？・・・・」

どちらにしろ、期待できない手段だろう。

すると、フィルは別人のように声を張り上げ、一瞬にして、アスラの喉（のど）に短剣を突き付けた。

「コイツの命がどうなってもいいのか！！！？」

・・・・・なにやっちゃってくれてんの！

・・・・・オレが、人質か。

そして、囲んでいた兵士たちは、たじろぎ、慌てふためいた。

「言葉の意味が分かったなら、武器を捨てろ。そして、床に頭をつけろ・・・身じろぎひとつでもしたら、皆殺しだ」

皆殺し・・・って・・・・・。

そして、フィルは楽しそうににんまり笑い、虚無（アイツ）に言った。

「後は、よろしく」

逃亡（後書き）

誤字、脱字や、この小説の意見があれば、言ってくれるとありがたいです。

悪魔

「・・・・もう！いつも言ってるのに！こんな昼間っから・・・・だるいよぅ・・・・ふあぁぁあ」

背伸びとともにあくびをしながら彼女は言った。

彼女？

さっきまではフィル（男）だったはず・・・・。

なぜか、黒いゴシックのワンピースに、つやのある黒い長髪に黒い瞳。

そして、人形のような整った顔立ち。年は同じくらい。

『超』の付く美少女、あるいは美女。

女装にしたって、気合いが入りすぎだ。

フィルの髪は茶髪。それに、瞳は透き通った碧（みどり）。

つまり、まったく別人の姿というわけだ。

「あのさ・・・・フィル・・・・最終手段って・・・・その・・・・さ・・・・女装？」

恐る恐る聞いてみる。

「・・・・なんだ、フィルはまだ私のことを伝えて・・・・・」

アスラはうつむいて、その言葉を遮り、申し訳なさそうに、

「いいんだ！言わなくて・・・・悪かった・・・お前にそんな趣味があるなんて思って・・・・」

それを遮り、彼女？は怒った。

「初対面から失礼なガキね！私は女よ！」

だが、話はかみ合わない。

「うん・・・・分かってる・・・・オレはお前の趣味、応援するから！」

「応援しなくていいの！・・・・・・あのね、勘違いしないで。・・・・私は、フィルじゃないの」

「・・・・・はいはい・・・・・そんな冗談は・・・・」

「私は『命灯揺らぎ』。・・・・・・人間に恐れられている、あの悪魔よ」

「フィル・・・・・・？」

「分からないのは無理もないわ・・・・・今の状況を打開すればいいのね？」

「・・・・・・」

えっと・・・・フィルが『命灯揺らぎ』で・・・・。

『命灯揺らぎ』が悪魔で・・・・？

「いいわ・・・・証明してあげる」

彼女は、アスラの喉元にに突き付けられた、短剣を下ろし、

その短剣で自分の手首に切りつけた。

「・・・・なにして・・・・？」

「いいから、見てて」

アスラに構わず続ける。

手首から溢れてくる自分の血を、口に含み、

足元にある観葉植物の植木に軽くキスをし、

そして、唱えた。

「我が血を承りし者・・・ 我に忠誠を示せ」

植物から反応(こえ)が聞こえる。

《いいだろう・・・ 忠誠を誓おう》

それは、アスラにも聞こえた。

ただ、何が起こっているのか分からず、

茫然と見ていた。

その植物は、驚く早さで成長し、建物内であるにも関わらず、あらゆるところに増殖し、

孤児院(ここ)は、その植物に飲み込まれ、

ジャングルのようになってしまった。

「すご・・・・」

だが、見とれている暇はなかった。

追手はすぐにやってくる。

「私があの役立(フィル)たずじゃないって証明できたかしら？」

彼女、『命灯揺らぎ』は自信に満ちた表情で言った。

「やめろ！そんなことしたらお前は・・・・！」

しかし、その小さな子供は力(ちから)を使い続けた。

「そんなことをしたら・・・・力(ちから)が暴走して・・・・・」

こうなることは初めから分かっていた。

洗脳されたヤツは、仕事を抹消するまで、暴走し続ける。

そして、最後には、自分も。

追手はやってきた。

それは、研究員に連れられた小さな子供。

研究員は言った。

「奴らを殺せ」

と。

その子供は、ふらふらしながら歩き、近寄って、

無邪気な子供らしい笑顔ではなく、

なにかが外れてしまったような、狂ったような、

嘲笑うような顔を向けた。

「殺ス殺ス殺ス」

明らかにその子供はおかしかった。
洗脳されているのだろう。

『命灯揺らぎ』に訊く。

「なぁ・・・ 薄気味悪いんだが・・・・・・ あれは一体・・・」

言いたくなさそうな顔をして、

「知らずにここに来たの!?・・・・ この場所は、孤児院という名目上の・・・・・・」

泣きだしそうな声で言った。

「悪魔の研究所だ」

そうか・・・・・ そういうことか・・・・・・。

「悪魔を作るための人体実験・・・・」

孤児院内で倒れたとき、オレはその様子を目撃したんだ。

目覚めたときは、倒れたこととしか覚えていなくて、その前になにがあったのか忘れていた。

「そうだ。奴らは、子供を国中かき集めて、その子供を使って、悪魔を生み出そうとしている」

「じゃあ、なんでオレは連れて来られた・・・・・？」

悪魔の実験は、成人したものではなく、小さな子供を使う。

この国での成人年齢は１８。

「それは・・・・・お前が・・・・・・・・・・・かはっ・・・・・」

そこで、言葉は途切れた。

「おい？どうした？」

『命灯揺らぎ』は倒れた。

悪魔（後書き）

本物・偽物

彼女は倒れた。

前触れもなく、音もなく。

一瞬にして倒れた彼女の横には、アイツがいた。

「危ないな・・・・まだ、それを言っちゃだめだろ」

倒れた彼女に優しく声をかけ、

丁寧に、『命灯揺らぎ』を横たわらせた。

オレはコイツを知っている。

「お前・・・・ラーク・ホルンか」

この国の王、エルン・ロイヤーの側近。

「この国から逃げ出すなんて・・・・相変わらず、肝が据わっているな」

「そっちこそ、よく居場所がわかったね」

「オレの情報網のすごさは、お前もよく知ってるだろ」

『命灯揺らぎ』を横たわらせたあと、こちらを見て、にやりと笑う。

「命灯揺らぎ・・・・・」

アスラは、『命灯揺らぎ』が握っている、短剣を持ち、構えた。

自分が今、どれだけアホなことをしているか分かっている。

そんな簡単な甘い考えで、ラークに襲いかかれば、返り討ちに合うのも分かっている。

死ぬかも。

だが、その様子を面白そうに見ながら、

ラークは、腰に携帯している、小さな銃を手に持って、構えた。

アイツが狙ったものはすべて当たる。

今度こそ、死ぬ。

本当にそう思った。

そして、耳障りな銃声。

気がつけば、オレの、構えた短剣は、宙を舞っていて、
地面に、突き刺さるようにして、落ちた。
「！！！」
狙っていたのは、最初から、オレではなく、
オレが持っていた、短剣。
「おいおい・・・・やめようぜ・・・・お前と戦いに来たわけじゃないんだから・・・・」
本当に、殺(ヤ)り合う気はないらしい。
そして、ようやく相手が口を開く。
「早く・・・・殺(ヤ)り合おうよ・・・・オニイチャン・・・・・」
人体実験の被害者(こども)が言った。
「ほーら、ご指名だぜ、アスラ・リーア」
苦笑いしながら言った。
「っ・・・・ラーク、何か策は？」

「なくても、十分(じゅうぶん)だ・・・・力を使わせる前に、終わらす」

ラークは、その子供のほうへ、駈け出し、水筒を開け、

足で、陣を描き、唱えた。

「水の精霊・・・雨竜(うりゅう)。我に姿を、我に力を、我に願いを」

水筒から、大きな水の竜が出て、地面に響くような低い声で鳴いた。

「水筒から・・・・竜って・・・・なんか、かわいそう・・・」

アスラは茫然とその感想を述べた。

ラークはその雨竜に乗り、空を走った。

「さあ、早く片付けよう」

その声に応えるように、雨竜は、さらに勢いをつけ、

その子供ではなく、近くで操っている研究員の方へ向かった。

だが、研究員は余裕の笑みを見せた。

子供に何かを指示しているようだ。

アスラはそれを見て、叫んだ。

身体が、震える。何かを予知しているように。何かが、心に訴える。

「ダメだ！ラーク！・・・・アイツなんか企(たくら)んでる！」

「うるさい！すぐケリがつく」

研究員は、

「バカめ、忠告を無視したのが、運の尽きだったな・・・・・殺(ヤ)れ」

すると、その合図に従って、

研究員がいる周辺の、岩や石、土が、空へ浮遊し始める。

ラークは、浮遊した岩にぶつかり、雨竜が消えてしまった。

そして、その合図と共に、

倒れている『命灯揺らぎ』の身体から、緑の光が輝き始めた。

それに目を覚まし、

「なんだ・・・・これ・・・・・・・力が・・・・・」

『命灯揺らぎ』とフィルの姿が、交互に変化し、2人とも、顔を歪めた。

「これは・・・・契約が・・・・解除・・・・・そんな・・・・・力が・・・・」

「フィル・・・・分離してしまう・・・・・早く・・・・・もう一度・・・・」

そして、人体実験された、子供は、おかしそうに嘲笑(わら)った。

「オニイチャン・・・・オネエチャン・・・・・・どうしたの?・・・・・何が苦しいの? 僕はこんなに力で満ちているのに・・・・かわいそうだね・・・・・かわいそうだね・・・・・はははははは!!!」

それをみた研究員は、瞬きもせず、

「よくやった!よくやった!私の実験は成功した!・・・・・お前

は本物になれたんだ！・・・・『命灯揺らぎ』に！」

そして、子供に問う。

「偽物はどうするんだっけ？『命灯揺らぎ』よ？」

にんまりと笑い、子供は言った。

「消ス・・・・消ス・・・・消ス・・・」

「よくできたね・・・・そうだ！消すんだ！」

「オニイチャン・・・・オネエチャン・・・・・偽物・・・・・サヨウナラ・・・・・」

『命灯揺らぎ』とフィルは、泣きじゃくり、

2人から、緑の光が放出していくに連れ、姿が消えかかっていく。

アスラは、2人を抱え、焦るばかりだった。

「どうすれば・・・・」

また自分は、なにもできないのか？
なにをすればいい？
なにをしたって、どうせ救えない。
今何が起こっているのか分からないくせに。
悪魔の気持ちなんて、どうせ分からない。
このまま、見ていればいい。

「ちがう！」

「引っ張られる．．．．向こうに．．．．フィル！早く！」
「ダメだ．．．．僕の命が持たない．．．いったん、契約を解除するんだ！」
「ダメよ！そんなことしたら．．．．フィルが．．．．死んじゃう．．．．」

「いいんだ・・・・もう・・・・・・一度あの時死んだ身だ・・・・新しい契約者が現れるのを・・・・・・」

「ステラは誰のために魔人になったと思っているの！？あなたのためによ！」

そんな会話が続いていく中、

アスラはなぜか、走り出していた。

2人を見捨てたわけではない。

あの子供を止めるために。

「なぁ、お前・・・・そんな悪役みたいなことしてて、苦しくない？」

その子供は本当に分からない顔で、それでいて、自信満々に、

「なにを言ってるの？オニイチャン・・・・僕はただ、本物になるために存在してるんだ」

「じゃあさ、お前のどこが、あの2人なの？」

「この力が、《命灯揺らぎ》である、なによりの証拠・・・・」

草木を増殖させたり、岩石を浮遊させたりした。

「そんなこと聞いてない！お前はあいつらと、全然違うよ・・・お前はいったいなんなんだ？」

すると、

子供は、その言葉に怒り、震え、

「お前なんかに！何が・・・・・僕の何が分かる！」

そして、アスラの周辺の地面が割れ、

地面が、一瞬にして、崖と化する。

アスラは、なんとか逃げ切ったが、

アスラの頭上には、浮遊した大きな岩石があって、

いつ、頭上から落ちてきてもおかしくない状況だった。

「もうおしまい？・・・・オニイチャン・・・・・口は達者だけど、弱いね・・・・・じゃあね・・・・オニイチャン・・・・」

アスラの頭上から、大きな岩石が落ちてくる。

かなりのスピードだった。

あぁ・・・だめだ・・・・オレはここで死ぬのか・・・・。

しかし、

アスラの頭から１０センチほどのところで、それは止まった。

子供も、それに驚いた。

「どうして・・・・・」

そこには、だれもいなかった。

防いでもいなかった。

「いったい・・・・」

アスラは、子供の方を見た。

自分で止めたのではないかと思ったから。

しかし、それは違った。

子供は、叫んだ。

「早く！アイツを殺せ！殺せ！殺せ！」

だが、子供が操っている岩石は、言うことを聞かない。

消えかかっている、『命灯揺らぎ』とフィルは小さく力なく言った。

「あれは・・・・力の暴走だ・・・・・」

本物・偽物（後書き）

次回は
グロくなりそうな感じですｏｒｚ

あ、あと

暇なとき、各話の編集を行っています。

詳しくは、活動報告に書いたので、
よろしくです。

トマト

「う・・・・・・・・ぁああ・・・・・・・・」

子供は、地面に膝をつけ、今にも倒れそうな様子だった。

「なんでだ・・・・・なんでだ・・・・・力が・・・・・外に出ていく・・・・・」

研究員は、

「どうした『命灯揺らぎ』???早く、奴らを・・・・」

「言うこと聞かない・・・・力が・・・・」

岩石は、子供の命令を無視して、空を浮遊し、

研究員の、頭上へ向かう。

「来るなーーー!!」

研究員は、走り、なんとか逃れようとするが、所詮人間。

結局、追いつかれ、岩石はその研究員の頭上に。

「待っ・・・・」

だが、その言葉は遅い。

ぐしゃり　と鈍い音。

あっけなく、その研究員は岩石に潰されてしまった。

あの岩石が自分の上から落ちていてもおかしくはなかった。

あれが落ちてきたら、自分もああなっていただろう。

アスラは、すこし想像してしまい、吐き出しそうになる。

酷いものを見た。

「・・・・・う・・・ぅう・・・・」

子供の泣き声で、後ろを振り返ってみると、

研究員を潰した赤く染まった岩石が、浮遊し、子供の方へ向かっていた。

緑色に光る謎の光は消え、フィルと『命灯揺らぎ』は契約を解除されず元通りになり、

『命灯揺らぎ』はフィルの姿に戻った。

そしてフィルは、

「あの子は、あの力で禁忌を起こした・・・・・もう、僕は、なにもしてあげることができない」

アスラはなんのことだか、分からない。

「禁忌って？」

「悪魔の魔力を使って、人を殺すことです」

「でも、あれは勝手に岩石が・・・・」

「あれは間違いなく悪魔の魔力で動いています。それが間接的であろうと関係ありません」

子供の方へ向かった岩石は分裂して、子供の身体にまとわり付く。

重さで走り逃げられなくなり、岩石に固められてしまった。

どんなに暴れても身動きがとれない。

そして、小石は、地面にその子供を中心にして、陣を描いていく。

「あれは？」

「闇の陣です・・・・」

その陣からは、この世に存在しないような、気配と嫌な威圧感を感じる。

そして、あっという間に陣が完成した。

子供はなにも言わない。

陣の完成とともに、聞き覚えのある声が聞こえる。

《人間ヲ殺シタ愚カ者ハ、オ前カ・・・・ナント哀レナ・・・・》

「殺したのは、この子供じゃない！」

助けようなんてこれっぽっちも思ってないのに、アスラは言った。

《デハ、誰ガ？》

「誰も人を殺してなんかいない」

《嘘ヲツクナ》

「その子は、ただ他人の力を奪って、暴走したんだ」

《デハ、奪ワレタ『命灯揺らぎ』ニ責任ガアルト？》

「そうじゃない」

《オ前ハ、何ガ言イタイ？》

「その子を解放しろ」

《フザケルナ》

何かがプツンとキレる音。

もしかして、オレの？

「ふざけて言うほど、お人よしじゃない！その子供を今すぐ解放しろ！」

《貴様・・・・何者ダ？》

「ただの脱獄者、アスラ・リーアだ」

《・・・・・・》

「なにか文句でも？」

明らかに、喧嘩を売るような発言。

殺されるかも。

《・・・・ソウカ、面白イ奴ダ。『命灯揺らぎ』、オ前ハ、知ッテイタンダナ？》

ん？なに？面白い？

《マダ、覚醒前カ。惜シイナ》

そしてヤツは、

《オ前ガ、ソコマデ言ウナラ、オ前ガ合ッテイルノカモシレナイ。ソノ子供ヲ見逃ソウ・・・》

そして、ヤツの声は聞こえなくなった。

子供は解放され、そのまま、地面に倒れ、気を失った。

そして、オレはというと、

「お前は、脱獄者としてオレが連れて帰る」

とラークに言われ、逃げる気力も体力もなく、あっさりラークに捕まり、

手錠をかけられ、フィルと共に、馬車に乗せられた。

トマト（後書き）

カタカナで一番読みずらい話だったと思います（笑）

っていうか、書く前に気がついたんですけど、

お気に入り登録してくれた方が３件！？

遅くなって、すいません、ありがとです☆

帰還

ここは夢の中。

「アスラ！！！！アスラ！！！！」

知ってる声が、オレを呼ぶ。

「・・・・記憶(これ)は、今のアスラには、必要ない。必ず重荷になるから・・・・・・。」

目の前のその声は、

手から不思議な光を放ち、

それを、自分の頭を撫でるようにし、オレは光で満ちる。

そして、早くもお別れ。

「さようなら・・・・アスラ・・・・大切な記憶(もの)なら、思い出せるはず・・・・」

悲しそうに、嬉しそうに彼女は言った。

「・・・・それまで、私は記憶(あなた)を背負って、罪を償わせてもらう」

そして、また聞こえる。

「・・ら・・・・・・アスラ！」

しかし、さっきと違う男っぽい声。

そして、クラクラするのはきっと、馬車に乗っているからだろう。

「分かったって！馬車から降りるから！」

夢から覚め、目を開けてみる。

すると、目の前にいるさっきの声の主と推測できる男は、オレを揺さぶり起こしていたようだ。

オレの目の前で品のある顔ににあわないくらい豪快に笑った。

「なにがおかしい！！？」

あまりに笑っているから、ムカついた。

「いや・・・・寝言が・・・・・」

状況が分からず、辺りを見回す。

すると、自分がどれだけアホか実感する。

「ここ・・・・馬車のなかじゃない・・・・」

恥ずかしすぎる。

オレは、会議の場のようなところの中心にいたようだ。

そして、周りの大勢の人の中には、笑いを堪えて、腹を抱えている者、

テーブルを叩いているもの。その他いろいろ。

そんななか、

「陛下、アスラ・リーアも起きたことですし、議論を・・・・」

エルンの秘書の真面目メガネの若い青年、ラガル・レントが口をはさんだ。

「あぁ、そうだな」

オレの目の前で豪快に笑った男は応える。

ん?待てよ?陛下って・・・・・

「お前！エルン・ロイヤーか！！」

なんてことだ・・・・アルタ帝国の若き王に・・・・起こされ、笑われたのか。

それで、なんかムカついて暴言まで吐いた。

恥ずかしくて顔が赤くなるどころか、

今の立場がいろいろヤバすぎて、顔が青くなる。

いや、赤と青だから紫か・・・・。

そして、ラガルは議論を促すように進めた。

「えー・・・・・それでは、脱獄者アスラ・リーアの件についてですが・・・・今回の処分はどう・・・」

オレの目の前にいるアルタ帝国の若き王、エルンはラガルの言葉を遮り、

「アスラ・リーアをラーク・ホルン直属の部下にする！」

それを、言い放つと、その場の大勢がざわつき始めた。

そして、そのなかのふんわりとしたショートな金髪の気の強そうな女が声をあげた。

「ですが・・・陛下・・・アスラ・リーアは信用できません・・・・」

いきなり反対意見。

「彼は先ほどまで、悪魔と行動を共にしていたのです・・・・」

悪魔と言えば・・・・・フィル・・・・・。

どこにいったんだろ・・・・・・。

「ぼーくはここですよー」

まるで、オレが考えていることが分かっているような口ぶりの陽気な声が聞こえた。

隣で、椅子と共にロープでぐるぐる巻きにされている。

だが、その顔は相変わらずニコニコとしている。

行動を共にして、分かったことがある。

それは、コイツが果てしなくバカでしょうがないということだ。

完璧な楽観主義にポジティブシンキング。

コイツのことは、まあいいとして、

気になるのはオレの処分。

「クランの言いたいことは分かるが、オレが言ってるんだ。・・・・信用できないか？」

「いえ・・・決してそういうわけでは・・・・・・・ならば、陛下、私に条件があります」

「いいだろう・・・・なんだ？その地位が不満なら、もう少し、あげてやってもいい。」

しかし、彼女は首を振る。

「いえ、そうではありません・・・私と脱獄者アスラ・リーアで決闘を行います。」

「もし、アスラ・リーアが勝てば、私は彼をこの城の一員として認めましょう」

エルンも少し考え、楽しそうに頷き、

「・・・・うむ、いいだろう・・・・決闘を許可する」

オレに勝算があると思っているのだろうか。

エルンは、嫌らしい笑顔を作り、アスラの方に顔を向けた。

「オレの期待を裏切らないように頼むぞ」

アスラの肩をポンと叩き、

「では、これで会議を終了する。クラン・レッサとアスラ・リーアの決闘は3日後だ。・・・・以上、解散」

会議をまとめ、

エルンは、ラガルを連れ、この場を後にした。

ラークは、フィルを解放し、

「わざわざ、来てくれてありがとな・・・お前は、あっちの国の女王様とやらが、待っているんだろ？」

「ありがとう・・・・じゃあね、アスラ、それと兄さん・・・・・」

フィルは一瞬にして消えるように去った。

自分の国へ帰ったようだ。

兄さんって、誰のこと？

え？ラークってフィルの兄さん？

そして、フィルを見送った後アスラは以前よりも断然いい、ベッド付きの牢へ連れて行かれた。

牢までの道のり、アスラの案内人の兵士が、不安そうな顔で尋ねてきた。

「クラン隊長と戦うそうですね・・・・」

「うん・・・・・そうだけど」

「少し小柄だからって、舐めてかかると痛い目みますよ。腕の一本くらいは覚悟しないと・・・・」

「そんなに強いのか？」

見た感じ、折れてしまいそうな細い腕に、太陽の光を浴びたことのないような透き通った白い肌。

まあ、いわゆる、か細い感じ。

だが、その容姿とは正反対に、今日の会議での格好は、話し合いの場であるのに、

なぜか丈夫そうな鎧を着こんでいて、腰には二本の剣を携えていた。
議会では、いつもそんな格好をしているのだろうか。

「はぁ・・・・」

めんどくさい。

だが、それとは裏腹に、

その兵士は目を輝かせて、

「クラン隊長にぎゃふんと言わせちゃってください！」

本当に期待するような目で。

なにか、恨みでもあるのだろうか。

「・・・・・・・・」

ああ・・・・めんどくせぇ。

そんな目でオレを見ないで・・・。

アスラは沈黙することしかできなかった。

帰還（後書き）

解除

「まさか・・・・・」

私は、手加減のつもりで用いたあの特殊な剣で、ヤツを貫いた。

といっても、普通は貫けない。貫けるはずがない。

違う表現をするなら、人間には効果がない。

私が用いたのは、そういう剣。

なのに、貫いてしまった。

その出来事は証明した。

「・・・・・姉ぇさん・・・・・遅かったじゃないか・・・・」

私が仕事から家に帰ったときのこと。

弟の声を聞いた。

私たちの親は、ちょうど私が物心着いた頃に亡くなった。

親が亡くなってから、私は生きるために必死に働いた。

働くと言っても、村中のゴミを拾い、それを売ってお金に換える程度のことだ。

ごくわずかなお金で、少量の食糧を買い、ぎりぎりな生活を送っていた。

弟のクオンはそのころの私の姿を見て、僕も働きたい。とよく言っていた。

そして、いつの間にか、クオンも一緒になって私と働いてくれていた。

だが、クオンが私と同じ仕事を始めたころ、

クオンは、原因不明の病にかかり、目を失明し、歩くことは困難で、

ついに、話すこともできなくなってしまった。

私は、1日も早く弟のために、拾ったがらくたをたくさん集め、車いすを作ってあげた。座り心地も悪く、がらくたで作ったため、ひどく脆(もろ)い。

私は、ごめんね、上手く出来なかった――。と言ったが、クオンは、瞳も口も閉じたまま首を振り、泣いてくれた。

しかし、そんな弟がなぜか血まみれで立っていて、剣を携え、見えない何かと会話をしていた。

「早く・・・・消えろ!!」

剣を何もないところに振り下ろし、叫んだ。

「クオン・・・・・どうしたの?・・・・・・一体・・・なにが??

？」

私には何が起こっているのか、分からなかった。

ただ、幻覚というわけではなさそうだった。徐々に傷が増えていくのだけ分かる。

見えない何かと戦っている。

混乱する私の方に振り向いて、クオンは微笑んだ。

まるで、私が見えているかのように。

「大きくなったね・・・・姉ぇさん・・・・・・でも、僕の方が大きいや・・・・」

クオンは立っていた。

「・・・・やっと・・・・終わった・・・・」

安堵の息を漏らし、剣を鞘に戻した。

しかし、剣を鞘に戻した直後、クオンは苦痛で声を漏らした。

「・・・・・・かはっ・・・・」

クオンは腹に手を当て、出血量を確認して、苦痛な顔をした。

「・・・もうダメか・・・全く・・・・治癒が追いつかない・・・
そのうち『命灯揺らぎ』も離れるか・・・・」

なにを言っているのか分からず、私はクオンの腹に目を向けた。

いつのまにかにできた傷。そして大量の血。

そして、明らかにクオンの腹には何かが刺さっている。いや、貫いていると言った方が正しい。

貫いている何かには、クオンの血が滴(したた)っている。

それを見たとたん、景色は変わる。

家の中だったはずなのに、赤く染まった荒れ地にいた。戦場のようなところだ。

「え・・・・・？」

そして、クオンが話していたと思われる声が聞こえる。

《ヨウヤク『命灯揺らぎ』ノ契約ヲ解除出来ル・・・・ソウスレバ我ハ・・・》

どこから聞こえるのか分からない。直接耳に届いている感じだ。

人間離れした声に、禍々(まがまが)しい威圧感。
ここにいるだけで、息が苦しくなる。

「姉ぇさん・・・・これを持って・・・・」

クオンが私に渡したのは、さっき振り下ろした、長くて不気味な青い剣。

これを私に渡して何をしろと？

「戦え」と言うのかと思ったら、違った。

「僕をそれで・・・・」

「殺せ」だ。

「え？何？ごめん・・・もう一回・・・」

動揺して、もう一度聞いてしまった。

「早く・・・・・」

「僕を殺して」

悪魔殺しの剣（前書き）

戦闘場面を忘れていたようなので、割り込み投稿させていただきました。　ほんと、すいません。

悪魔殺しの剣

しんと静まり返る会場。

それと、感じる緊張感。

緊張のせいだろうか。

夏の気候にしては、肌寒く感じる。

身体が震える。

オレとクランはこの会場の中心で、

静かに決闘の始まりを待っていた。

すると、奥の入り口から人影が現れた。

質素で装飾のない服に、

手入れが良くされ、寝癖１つない、

明るいブルーの髪の好青年。

女性なら振り向かずにいられない、

典型王子様なルックス。

この国の若き王、

エルン・ロイヤーがようやく、やって来た。

周りから歓声がおこる。

目立つのは、特に女性のメロメロな声。
羨ましいかぎりだ。

「これより、脱獄者アスラ・リーアとクラン・レッサの決闘を開始する」

その始まりの言葉と共に、周囲の歓声は、激しさを増した。
円形の会場の客席には城内の多くの兵士や関係者。一般客もいる。
その賑やかな円の中心には、
睨まれている男と睨んでいる女。

それは無論、オレとクラン。

クランは、あの会議のときのように、
重そうな鎧を身に纏(まと)っていた。
腰には2本の長剣。赤いのと青いの。
オレはというと、正々堂々という意味で、
クランと同じ装備。かなり頑丈なものだ。
武器は、初心者でも扱えるような、軽い大剣。
もちろん、身を守るための盾もある。
ルールは、戦闘初心者であるオレのために、

相手に一太刀(ひとたち)浴させられたら、
オレの勝ち。

まあ、一太刀だけでもかなりの重傷を負うと思うが。

「それでは、始めっ！！」

ラガルの開始の合図。

それと同時に、クランは鞘から赤い剣を抜き、
勢い良く、こちらに向かって走り出した。

それを見て、一歩遅れをとり、焦りながら、
オレも剣を交えるように、相手に斬りかかった。

力の差は圧倒的。

「……っ！！」

剣を握ったのは、これで2回目。
やはり、武器というものは重い。

甲高い音が響く。

一瞬で、オレの握っているの大剣は宙(ちゅう)を舞う。

力の差は、かなり大きい。

「もう終わりか？」

つまらなそうに、それでいてなぜか愉しそうに笑う。

「……」

恐怖のあまり、声がでない。

「チャンスをやる、大剣を握って、構えろ」

クランは鞘へ赤い剣を戻す。

オレはその間に、急いで、警戒しながら、
手元にない大剣を拾う。

だが、うまく構えられない。

手から冷や汗が滝のように流れ出て、

その滑剤によって、手が滑り、構えられない。

「次は容赦しない、お前は相応しくない」

殺気を帯びたその声は、嫌悪感丸出し。

そしてクランはめんどくさそうに、
もう一方の青い剣を鞘から出した。

「さあ、来い」

どうにか、大剣を構えてはみたが、
どう攻撃を仕掛けるか分からない。
勝算は皆無に等しい。
「来ないなら、こっちから行くぞ！」
剣は諸刃（もろは）であるため、
剣同士で交わり、力で負けると、
自分の刃（やいば）が自分を傷つける。
剣と剣が交わるたびに、傷ついていく。
鎧は取れ、中の服もぼろぼろ。
鎧が覆っている腕や顔の傷も増えていく。
気がつけば、立つ力もなく、地面に倒れていた。
「これで、楽にしてやる」
クランは、間合いを一気に詰め、鋭い剣が襲いかかる。
胸に突き刺さる。
「……！」

クランは躊躇(ちゅうちょ)しなかった。

だが、驚きの声をあげたのは、クラン。

「……んな…」

顔を青くさせ、彼女は言った。

「お前……悪魔だろ」

証明

「お前……悪魔だろ」

騒がしすぎる会場には、あまり響かない、
冷静すぎる声で言った。

きっと、彼女なりのオレへの気配りだろう。

アルタ帝国の人々は、
悪魔という存在を嫌っている。

なぜなら、昔、悪魔によって帝国が滅びそうになったからだ。

今では、悪魔はみな滅びたと言われている。

おとぎ話の話だが。

「……だれが？」

その滅びたとされる悪魔が自分？

意味が分からない。

「この、青い剣がそう証明している」

「なに言ってるんだ！？　悪魔は滅びたんじゃなかったのか！？」
「そうだ。悪魔はみんな滅びた」
「……は？」
「だが、肉体が朽ちただけだ」
馬鹿馬鹿しくなって、手元にある大剣を握る。
「それに……お前は自分が他の人より異常なほど傷の治りが早いと思ったことはないのか？」
「そんなこと……」
ないよ。と言おうと思ったが、それが証明できなかった。
クランに付けられた傷。
両刃である大剣で傷ついた傷。
全ての傷がなかった。
「そんな……なんだこれ？……え？」
「身体は、お前が言うことと逆だが？」
冷たく嘲笑うように言う。
「いつ悪魔と契約した？」

闘いを応援する声は、両者が戦闘をやめ話し合っている姿に気付いたのか、
徐々に小さくなっていく。

「だから、なんのこと！？」

「とぼけるな！！」

その顔は、悪魔を嫌うというよりは、
憎悪するようだった。

「分かった、お前がその気なら、私は…」

相手も、青い剣を強く握る。

きっと、その剣でオレが否定できないくらい、
切り刻むつもりだろう。

そのつもりなら、オレだって…。

戦闘の始まりは、オレの駆ける音。

静寂になった闘技場は、再び勢いの良い歓声に包まれる。

「っ…」

クランは、本気を出してきている。

さっきまでの戦いは実力の半分も出していない。
戦闘に不馴れなオレでも分かるくらい、隙がない。
「どうした？」
面白おかしそうに、剣を交える相手（クラン）。
「くそっ」
これじゃ、証明するどころか、
ずたずたに殺（ヤ）られる…。
あぁ…もう駄目だ。
「……」
大剣を握る力を緩める。
剣を交える直後に大剣を手から離す。
その瞬間、クランは驚いた表情を見せた。
さくり
自分の肩に、剣が降り下ろされる音。
「……貴様、何のつもりだ！！お前…」

だが、驚きはそれだけではなかった。

「……」

クランは、驚きのあまり、目を見開く。

言葉は中断されたまま。

オレは怖くて目を閉じていた。

「……どういうことだ！？」

クランは、オレに聞いた。

オレは、恐る恐る目を開き、
切られたと思われる肩を見てみる。

「……」

オレにも分からない。

分かるのは、
肩に向かって、何度も剣を降り下ろすクランの姿と、
切られているはずの肩が、切られていないこと。
自分の知識に乏しい語彙力でうまく表現するなら、
肩が剣を受け付けない感じとか、

はじいている感じとかが適切な表現だろう。

「お前…、悪魔と人間、どっちだ？」

クランは、イライラしている様子だ。

オレはその問いに一言。

「ワカリマセン」

証明（後書き）

泣き虫悪魔の物語の過去編、
《その悪魔の長話》を書きました。
両立で書いて行きたいと思います。
よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9206t/

泣き虫悪魔の物語

2011年11月17日05時44分発行